

母校を卒業して40年

教育・昭和52年卒 香西 弘志

昭和52年3月に香川大学教育学部を卒業し、はや40年の月日が過ぎました。当時の教育学部は学年の定員が二百数十名で、先生の数も今の3倍は在籍されていたのではないかと思います。私の所属する地学研究室では、天文学の三沢、小山先生、気象学の森先生、地質鉱物学の坂東、谷山先生の5名の先生がおられました。物理や化学、生物研究室には各6名、理科教育研究室に2名の先生がおられ、理科教室全体で24名もの先生が所属され教員養成学部理科というよりはミニ理学部のような雰囲気だったと思います。私たち学生もそれぞれが所属する研究室で、担当の先生の指導を受けながら、各領域の専門性を深めるために昼夜を問わず研究に没頭していたように思います。余分なお金を持っていない中でも、多くの専門書の購入や観測データの処理のためのプログラム電卓の購入など、躊躇なく何十万円かのお金を投入したことを思い出します。

当時の理科の先生方がいつも言われていたのが、「学生時代にその人自身のバックボーンとなるような勉強をしっかりしておけば、将来、どんな難しいこと出合っても必ず対応できるよ。」ということでした。教科や領域が違っていても、一つの専門性を徹底的に追求していくノウハウを身に付けさえしておけば、別のどんな課題に対して身に付けた探究の方法を活用すれば必ず解決できるのだから、今取り組んでいる研究に自信をもってしっかりやりなさい、という教えだったと記憶しています。また、先輩からは、子供に対して教科の内容をいかに上手に教えるかという力を身に付けることより、自分自身が大学で経験した「学問の追求(真理の追究)の楽しさ」をどうやって子供に教えるか、自然界の原理原則を学ぶ意義をどう子供に理解させるか、がとても大切なことだと教えられてきました。中学校で40年近く理科教育に携わった者として、改めて、当時の先生や先輩の教えは自然科学教育の本質をついたものだったな、と今更ながら感心をしています。そうした教えを受けながら、学生時代に私は天文学の三沢先生に師事し、3年次と4年時に年3回の岡山天体物理観測所(現国立天文台岡山観測所)で光電管による短周期変光星のUBV測光結果をもとに、卒業論文を作成し卒業することができました。当時は、研究することが楽しくて仕方なく、新しい知識を身に付けたいと専門書を読んだり、観測所で他大学の先生に教えを頂いたり、60年あまり生きてきた中で、最も充実した時期だったのではないかと考えています。

恩師である三沢先生が亡くなって二十余年過ぎますが、私自身は今でも先生をとっても素晴らしい先生だと思っており、尊敬の気持ちとともに感謝の気持ちを持っています。そのような素晴らしい先生に出会え、今の自分があるのは香川大学教育学部で学ぶ機会を与えていただいたからだと強く感じています。時代は変わり、教員の需給の変化とともに教育学部の使命も変わり、今はどちらかというと教員養成に特化された教育学部に変わりつつあるようです。それも時代の流れで、教育学部としては教員としての実務を身に付け即戦力の人材を育成することはとても重要なことで納得はしていますが、かつての卒業生に比べ、教科の専門性の浅さと、卒業して教員になった後も life work として継続的に研究する姿勢の乏しさに若干の淋しさを感じる毎日です。